

## チェンマイ大学での貢献 (62)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では、急激に変化する身の回りの環境に対して筆者がどの様に対応しているか（あるいは来たか）を披露する。世の中には捨てる神があれば拾う神もあるとはよく言ったものである。あいつはあのグループ派に属すると言う勝手な仮想敵視的レッテル (label) を限られた情報から「間違ったメッセージ」だけを取り出してグループで攻撃すると言った、まさに「戦争ごっこゲーム」(War game) がまかり通っている。噂には聞いていたが遙かに想像を超えるもので驚きである。しかも高いレベルの論争ならまだしも、偏見に基づく判断基準を設けて、公平でない結論や結果を自作のシナリオから作り出したかに見えるプロセスで、あたかも公平性を問う姿勢を演出しても、一時的ならともかく何度も繰り返すことは難しい。逆にそうした行程を進んでいる間に、大学の発展という重要な目標からは大きく外れ、他大学との間に大きな差が生じる。大学講成員にとっても自から選出したとは言え大きな誤算であり、かといって直ぐに取り返しが付く問題ではない。「後悔後に立たず」の如しである。任期が来る次の機会を待つ方法もあるが、それで決着する問題ではない。その時期が来ても同じような人材しか育てていない事に気付くのが大方の事例でもある。じっと我慢をしても次期に全てが一掃改新されると言う保証はない。有名大学、大きな大学ほどそうした改革への萌芽は極めて遅いし、下手をすると発芽せずに土中で枯死する懸念も大いにある。そうした事に気を遣い、案じてみても始まらない。自分は自分であり、やるべき事を粛々とやるしかない。構成員を激励するのではなく、失望させる組織の体質はかなりの時間を費やすか、内部構成員の意識改革や内部告発が無い限り極めて困難である。だからといって何もしないのではその日が立たない。やらなければ自分の評価が下がるし、何もしていないという逆の評価にもつながる。と言うのが前回の内容への更なる加筆部分となろう。

ではどうすればよいか？筆者の出した結論は以下の様である。すなわちかなりへりくだって、しかも謙虚に考えると「基準がどうであろうと評価されないのは、やった仕事の内容がそれに値するレベルにないからである」とし、それならば努力が足りないのであるから「さらに努力して相手が驚くほどの成果を見せる以外にない」と判断した。だからといって容易に評価が変わると言う保証もない。今日までの自分が歩んだ過去10年と特に最近5年の実績を振り返ると、現在も進行中の国際プログラムは2つある。一つが3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムであり26年の継続実施の実績を持つ。国際インターンシップ事業も過去15年ほどの継続実施で現在も継続中である。しかしこれらは新規事業としてはカウントできないほど古い歴史と背景を持つ。では他に何が？となると学部レベルでは大学院レベルの講義が学期毎に1つ、年間を通じて2つ。関係した他学部を見るとビジネス・アドミニストレーション学部 (Faculty of Business Administration) での日本語教育への協力と知的所有権 (Intellectual copyright) である特許 (権) (Patent) に関する特別講義、人文学部 (Faculty of Humanities and Social Science) でのアセアン大学ネットワーク・コンソーシアム(ASEAN University Network) に関する特別講義、大学レベルでは研究業務センターでの研究プロジェクト起案とスタッフへの日本語教育、タイの科学技術省の下部組織 STeP Science & Tcnology Park) への研究協力 (特にタイ北部での煙害対策プロジェクト, Haze Free Thailand project)、また「この機関と日本の京阪奈地区とのMOU (Memorandum of Understanding) に基づく連携促進の仲立ち、さらに三重県がタイ王国に提案のイノベーション・センター設立構想 (Innovation Center) への関与な

どが挙げられる。これらは未だ連携が緒に就いたところであり、これからと言う段階にある。日本の機関とチェンマイ大学との学術的機関の関わりとして、日本学生支援機構(JASSO)、日本学術振興機構(JSPS)がある。この2つの機関も特に前者はジョイント・シンポジウム(Joint symposium)開催の度に話題提供者としての扱いを受けてきた。同様な形で毎回参加されていた日本留学で博士の学位をJSPSの支援で取得した教授もあたかも不可欠のカウンタパート(Counterpart)的存在で、自分が如何に学位取得できたかを語ると共にアップデート(Update)な研究活動の一端を紹介されてきた。しかし筆者の大学レベルの研究業務センター(Research Administration Center)でのアドバイザーと言う身分と共に、ニュー・ポリシー(New Policy)と言う名の下で、長く続いた筆者の契約(もちろん1年ごとの契約更改での継続)がその月の2週間を残す切羽詰まった時期に解任となり、当然のことながら上記機関であるJSPSとの連携イベントへの参加も切れた。上記の教授もその後のプログラムから名前が出ることはなかった。個人的には筆者とのバランスの都合で外されたのではないかと誰もが想像しているところが如何にも政治的配慮が働いているように見えて成らない。いわゆるこのバランスが関係者両成敗である。文句を言おうものなら「そう言っても、うちの方も同じように参加を控えさせている」と言う言い訳ができる状況が用意されている。新しいポリシーだという為の布石(言い訳)がこの対応処置である。ご本人にはどのような説明を為れているかは、あずかり知らぬが迷惑な話である。事の次第を正当化する様な、目に見えた繕いが表面を覆った薄い皮の裏に見え隠れしているから滑稽である。さて話を元に戻そう。

筆者の貢献はと言うと余りにも口幅つたいが、これまでの経緯から事実に基づき振り返ると、国際・学術的活動としては「持続可能な農業:食料とエネルギーネットワーク(SAFE Network)」でのチェンマイ大学の会員資格取得への貢献などが考えられる。特にSAFE Networkは当初チェンマイ大学は会員校として資格はなく、筆者がベトナムの大学での招待講演以降に知り合った知人との縁がその後の急速な展開・進展をもたらし、現在のチェンマイ大学(主として工学部)とSTePの地位を築いた。マエジョ大学、チェンマイ・ラジャパット大学、ソクラ大学などタイ国内の大学のみならず、ベトナム、フィリピン、インドネシア、カンボディア、マレーシア、スリランカ、台湾、日本、オーストラリアなどの大学との関係構築にも貢献した。またこのネットワークを通じてインドの大学との関係も新たに創造した。既述した3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムに類似のコンセプトを理念とした事業なれどネットワークは3大学にとどまらず多くの国の大学がメンバーとして関係している。当初筆者がこのネットワークの話を持ち帰ってチェンマイ大学で話したところ「学術的な部分が果たしてあるのか」といぶかる意見もあったが、筆者は「ならば、われわれがそうした部分をカバー(Cover)しリード(Lead)してその方向に持って行くだけのリーダーシップ(leadership)を持てば良い」と切り返し結果として現在に至っているが、このネットワークの活動は極めて積極的で年に2~3回の国際ワークショップ(International workshop)開催に加え、会員大学の中の1つまたは複数の大学での1週間に及ぶサマー・コース(Summer course)開催など、頻繁に顔を合わせ相互理解の推進(Mutual understanding promotion)と学生への教育、特に周りで何が起きているかと言う事への啓蒙、現地実頭圍場視察、新情報・話題提供などに力を注いでいる。ここ2,3年でもインドネシア3,4回、フィリピン4回など複数の大学でのサマー・コースに参加する機会を得ている。有り難いことに高齢の筆者に対し、ホスト大学並びに参加者の中から「健康に気をつけてくれ、We still need you」と言う言葉を返してくる。お世辞でも嬉しい限りである。さらに国際交流関係事業への参加はこれだけではない、筆者の本来の専門分野であるタイ農業工学会例会(Annual Meeting of Thai Agricultural Engineering Society)への毎年の参加と論文発表、その他の関連国際学会での同様な形での参加が年間

総計10回前後である。うち招待講演が3割程度、サマー・コースはいつも全額負担の招待であった。ネットワークを管理運営する責任者の何処にそんな予算があるのか筆者自身も不思議に思うが、それは事業企画オーガナイザー (**Program organizer**) にまかせて、相手方の要請に有り難く応じている。アジアの人材育成に寄与するという自身の初志の貫徹と自らが果たすべきミッション (**Mission**) と位置づけ前進することを旨としている。別途支援したネットワーク責任者の教授ポスト昇格記念祝賀会が大学を挙げて催され招待を受けた。しかも一足先に教授に昇格した別の教授もこのネットワークに深く関わっているが祝賀会はこの2人のために執り行われた。支援した甲斐もあり、またネットワークの順調な発展を目のあたりにし、深い感動と心からのお祝いを密かに抱いて出席させて頂いた。祝賀会と併せて国際ミニ・シンポジウム (**Mini International symposium**) も開催された。このときも招待講演者の一人として話題提供の役割を科せられた。嬉しく、心温まる招聘、要請である。その後もワークショップの開催と同時にサマーコースが前後併行して企画された。これまで既に2度ほどのサマー・コースへの話題提供者としての招待で頂いた謝金が換金して無かったので、2名の学生を引率して参加に臨んだ。学生の選考は事業のアナウンス、応募案内、インタビュー、3名の教員による選考委員会での評決と言う極めてフェアなプロセスを踏み、2名が最終的に選考された。参加学生に拘わる経費は航空運賃と参加登録費であり、航空運賃は未換金のインドネシア・ルピアで負担し、実質参加登録量のみが負担という有り難い条件であり、主催者側の配慮もあり1名の学生当たり1週間の参加で100ドルという破格の条件である。あとは参加学生がどれだけ身になる経験を取得、あるいは習得してくれるかにかかっている。資金支援ではインターンシップ事業への支援も試みた。あれやこれやでたいした額ではないが支援した。問題は効果であり、その後の展開につながる継続性である。参加学生のみが良かったというのではなく、事業としての評価にはその目的、教育プログラムとしての観点、メリットから成果の評価をする必要がある。ただ単に参加すると言うだけにとどまらず継続する必要がある。理由は簡単で、良い事業は継続、悪い事業は自然消滅する運命にあるからである。国際交流事業展開には多くのメリット、目的が含まれて居るが学術的観点のみならず、国際化 (**Internationalization**) としての国際的エチケット、マナー並びに世界常識、同世代の国際的人脈ネットワーク作り (**Global human networking building**) などが含まれることを忘れては成らない。わかりやすい言葉で言い換えれば「グローバル人材の育成」と言う事になるだろうか。事業の内容が重要であることに加えて、如何にそれを実施するかと言うノウハウ (**Know-how**) の部分が事業には極めて重要である。くり返し協調するが「誰の為に? 何の為に?」である。さらに国際交流を掲げる以上は相手国、あるいは相手機関への貢献 (**Contribution**) と言うところをしっかりと認識し、押さえておく必要がある。国際交流事業の名の下で金儲けを企てるなどは持つてのほかであり、補助金の不正利用などは問題外である。にもかかわらずこうした話題が性懲りもなく忘れた頃に浮上してくるのも不思議である。何が問題の原因でそうなったのか、その根拠はなになのか、どの様に誰が責任をとるのか、と言った認識が共有されていないと、組織内で不協和音がおきる。不信感が相互信頼の距離を拡げ、組織の活動は急速に凋落の途をたどる。さらにそうした不祥事が活動の速度や領域を狭め、ついには組織の存在をも脅かす。組織構成員の誠実で、たゆまぬ勤勉な勤務姿勢が定年退職後の小使い稼ぎ的勤務姿勢を一掃するものでなければならない。筆者は常に「日の丸を背負った国士でありたい、また組織の構成員は志を同じにする同志」と認識しているが、価値観、責任感、組織としての一体感がないと名ばかりの組織になる。大きな大学は年がら年中キャンパスのどこかで工事が行われ、古い建物のスクラップ・アンド・ビル (**Scrap & Build**) ドが行われている。コンクリートの寿命は約50年から60年であり、創立55周年になるチェンマイ大学 (ただし工学部は50周年で、学部によって

